小学生の無気力感と学校環境適応感との関係

船木　智美*・熊谷　信順

The Relationship between lassitude of pupils and thier adjustment to elementary school

FUNAKI Satomi and KUMAGAI Nobuyori

(Received February 10, 2005)

キーワード：無気力感、学校環境適応感、小学生

1　問題と目的

今日の学校は、いじめや不登校、学級崩壊、非行の増加、学習意欲の低下等さまざまな問題を抱えている。このような問題の背景としては、近年の子どもたちの社会性をめぐる課題、たとえば、自尊感情に乏しい、人生目標や将来の職業に対する夢や希望等を持たず無気力な者が増えている、意欲が低下しているといった無気力状態が指摘されている。

不登校については、2001年に比べると2002年、2003年の不登校児童生徒数は減少している。しかしながら、いまだに13万人を超え、これを全体の児童生徒数の割合で見ると、小学校では275人に１人、中学校では36人に１人となっている（文部科学省、2003）。

さらに不登校には含まれないが、年間30日未満の欠席日数の児童生徒が相当数いることや、学校に対する忌避感情から遅刻や早退を繰り返している者も存在していることが調査によって明らかになっている（古市、1991；森田、1991）。また、登校している児童生徒の中にも朝からぐったりしてやる気のない者も見られ、体調不良を訴え保健室を訪れる者も少なくない。このような児童・生徒は、無気力状態にあることが多い。小田（1991）は、児童・生徒の無気力状態・無気力傾向については、不登校児童・生徒だけでなく、登校しているものにも見られると指摘している。

これまで、大学生を対象にした無気力状態については、スチューデント・アパシー（student apathy）と概念化され、多くの研究がなされてきた。アパシーとは、無感動、無気力、無関心の状態、つまり不適応状態であり、青年が特別な理由なしに学業への関心や社会的関与への積極性を失ってしまう状態と定義されている。このような学生や生徒の無気力傾向が現代の青少年の一般的傾向として取り上げられるようになり（笠原、1977；加藤、1987）、この傾向は本来活動的な小学生まで及んでいると指摘もなされている（深谷、1990；楡木、1991）。この無気力傾向は、「学業に対する選択的な無気力」ばかりではなく、友人関係や進路など生活全般に広がっている（笠井ら、1995）。また、子どもの無気力の様態として、小田（1991）は、①何を語りかけても反応がない、②一見、落ち込んでいたり、学業成績が下降していても、教師の問いかけに対し「別に」としか答えない、③友だち同

＊山口大学大学院教育学研究科

士、校庭や街頭で喜々として「遊んで」いることが見られない、④遊びもしないが勉強もしない者が多くなった、⑤「正義派」が減少し、無関心にいじめや暴力の横行を傍観している、⑥進路の決定に際し、「自分のやりたいこと」を持っていない子が多い、というような現場の教師からの実感を報告している。

このような観点から、笠井らは、無気力を「心理的な原因で、日常生活のさまざまな場面において意欲の減退を示す状態像」と、また、その心性を無気力感と定義し、中学生・小学生の無気力感を測定する尺度を用いてその様態を調査した。その結果、小学生では「充実感・将来の展望の欠如」「学習不適応感」「身体的不全感」「消極的友人関係」「非能動性・無力感」の5因子が抽出され、実態が明らかになった。しかし、下位カテゴリー間での項目移動や重構造をもつ項目、信頼性の不安定な因子、項目数の少ない因子などがあり、無気力感尺度について信頼性や妥当性が十分とは言い難いと考察している（笠井ら、1995）。

笠井らの先行研究は、いまから約10年前の1995年のものである。そのころ、不登校児童・生徒数が増え続けており、文部省は1992年「不登校はどの子にも起こり得ること」とし、1995年にはスクールカウンセラー制度を導入した。小学校の低学年においては、体験重視の生活科が定着し、教師は指導ではなく支援するという立場が強調され、学級崩壊に見られるような秩序のない状況が増えていった。その後、不登校児童・生徒の数は増加の一途をたどり、学校は、いじめ、学級崩壊、非行、学力低下に加え、特別支援を要する子どもたちへの対応に追われるようになった。そこで、1998年に学習指導要領を改訂し、「ゆとり」ある教育を打ち出して週5日制を導入した。また「生きる力」を育むことをねらいとして総合的な学習の時間を設け、これらを2002年から実施した。週5日制になって授業時間数が減ったため、行事の精選が行われたり1日の授業時間が増えたりした。また、基礎学力を育てるために「個に応じた指導」として、少人数指導を取り入れる学校も増えてきた。その結果、子どもたちは時間に追われ、学校が逆にゆとりのないものになったように思う。以上述べたように、10年前に比べ、学校の教育課程はかなり変わった。そのために、子どもたちの学校や家庭での生活の様子も変わっていった。

そこで、本研究では、状況の変化に伴い、小学生の無気力感の実態に変化があったかどうかを先行研究の無気力感尺度を使って明らかにすることを第1の目的とする。また、生活の大部分が学校である小学生において、学校環境に適応していることは、意欲的に生き生きと生活していることにつながる言えよう。そこで、小学生の無気力感と学校環境適応感との関係を明らかにすることを第2の目的とする。

2　方　法

（1）調査内容

調査方法は質問紙法を用いた。小学生無気力感尺度と学校環境適応感尺度を使用した。

笠井ら（1995）の作成した小学生用無気力感尺度(28項目)を用いた。この尺度は、「充実感・将来の展望の欠如」「学習不適応感」「身体的不全感」「消極的友人関係」「非能動性・無力感」の5因子から構成されている。「とてもそう思う」「かなりそう思う」「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」の4件法で行った。

学校環境適応感尺度は、内藤ら（1987）によって高校生対象に作成された学校環境適応感尺度の36項目のうち、進路と特別活動の項目を除いて小学生用に21項目を選択し、表現

を一部修正して用いた。この尺度は、「学習意欲」「規則態度」「教師関係」「友人関係」の4因子から構成されている。「とてもそう思う」「かなりそう思う」「あまりそう思わない」「全くそう思わない」の4件法で行った。

（2）調査対象

A市内のB小学校5年生157名(男子95名、女子62名)

（3）調査時期

平成16年6月に学級担任によって一斉に実施した。

3　結　果

（1）各尺度の因子構造

①無気力感尺度について

無気力感の構造を検討するために、28項目の評定値を用いて因子分析(主因子解→バリマックス回転）を行ったところ、固有値1.0以上の基準で7因子が抽出された(Table 1)。

それぞれの因子の命名は以下の通りである。

・第1因子：先行研究の「充実感・将来の展望の欠如」と「学習不適応感」「消極的友人関係」の項目から構成されている。自己効力感や充実感のなさを表す項目と将来の見通しのなさを表す項目から構成されているが、この因子の中に学習意欲に関する項目が含まれている。このことは小学生にとって学習が生活の目標や将来の見通しにかなり影響を及ぼしていることがうかがえる。この因子は、「生活の目標・将来の見通しの欠如」と命名した。

・第2因子：主に先行研究の「身体的不全感」と「非能動性・無力感」の項目から構成されている。身体的・気分的な不全感を表す項目と無気力感を表す項目から構成されている。この因子は、「身体的不全感・無気力感」と命名した。

・第3因子：主に先行研究の「消極的友人関係」の項目から構成されている。積極的な友人関係を求めない傾向を表す項目から構成されている。この因子は、「消極的友人関係」と命名した。

・第4因子：先行研究の「学習不適応感」の項目から構成されている。学習に対する意欲のなさを表す項目から構成されている。この因子は、「学習意欲の欠如」と命名した。

・第5因子：「充実感・将来の展望の欠如」の項目から構成されている。この因子は「充実感の欠如」と命名した。

・第6因子：「非能動性・無力感」の項目から構成されている。特にこの2つの項目は、能動性のなさを表していることから、「非能動性」と命名した。

・第7因子：「消極的友人関係」の1つの項目から構成されている。「孤独感」と命名した。

先行研究では、「充実感・将来の展望の欠如」「学習不適応感」「身体的不全感」「消極的友人関係」「非能動性・無力感」の5因子が抽出されたが、本研究では、上記の7因子が抽出された。本研究で得られた第1因子「生活の目標や将来の見通しの欠如」の項目に学習に関するものが含まれており、小学生にとって、学習が目標や将来にかなり影響を及ぼしていると言えよう。

なお、第5、第6、第7因子は項目数も少なく全体の説明度が低いことから、以下の分析にはこれらを除外して、第1因子から第4因子のみを取り上げることにした。

②学校環境適応感尺度について

学校環境適応感の構造を検討するために、21項目の評定値を用いて因子分析(主因子解→バリマックス回転）を行ったところ、固有値1.0以上の基準で5つの因子が抽出された(Table 2)。

それぞれの因子の命名は以下の通りである。

・第1因子：先行研究の「学習意欲」の項目でほぼ構成されている。「先生によく質問する」の項目が入っていることは、「質問」という言葉から学習場面でのことと判断したのであろう。この因子は、先行研究と同様、「学習意欲」と命名した。

・第2因子：先行研究の「規則態度」の項目でほぼ構成されている。学校の規則に対する態度を表す項目で構成されている。「自分の学校の先生に対して素直である」の項目が入っていることから、教師の言うことは「きまり」であるという意識を持っているのかもしれない。この因子は、「規則態度」と命名した。

・第3因子：先行研究と同様、教師との関係を表す項目で構成されている。「教師関係」と命名した。

・第4因子：友人との関係を表す項目で構成されているが、「性格の明るさ」の項目が入っていることから、性格の明るさが友達の多さにも影響していると考えているのかもしれない。この因子は「友人関係」と命名した。

・第5因子：先行研究の「友人関係」の項目から構成されている。自分のことについての理解の2項目が抽出されている。この因子は、「自己理解」と命名した。

学校適応感尺度においては、先行研究では、「学習意欲」「規則態度」「教師関係」「友人関係」の4因子が抽出されたが、本研究では上記の5因子が抽出された。先行研究の「友人関係」の項目が、本研究では、「対友人」と「対自己」に分かれている点が違うが、ほぼ同様の因子構造が見られた。

（2）無気力感と学校環境適応感の関係

無気力感尺度の因子分析によって得られた5つの因子項目の評定値を個人ごとに平均して、各因子尺度得点とした。これらの因子尺度得点の特徴によって表される対象者の分類を行うために、主要な上位4因子尺度得点を用いてクラスター分析(ウオード法)を行った。その結果、3つのクラスターを採用することが適切と判断した。3つのクラスターに含まれる人数および各因子尺度得点の平均と標準偏差をTable 3に示す。これを図示したものがFigure 1である。

次に、各クラスターの特徴を明らかにするために、各因子尺度得点ごとに3つのクラスターを要因として分散分析により5パーセント有意水準で検定したところ、第1因子から第4因子のすべての因子尺度得点においてクラスター間で有意な差が認められた。すなわち、第1因子「生活・将来の見通しの欠如」では、クラスター3はクラスター1より高かった。第2因子「身体的不全感·無気力感」では、クラスター2はクラスター1より高く、クラスター3はクラスター1より高かった。第3因子「消極的友人関係」では、クラスター2はクラスター1より高く、クラスター3はクラスター1より高かった。第4因子「学習意欲の欠如」では、クラスター2はクラスター1より高く、クラスター3はクラスター1より高かった。また、クラスター3はクラスター2より高かった（Figure 1)。以上のことから、クラスター1は、「生活·将来の見通し」が高く、「身体的不全感・無気力感」をあまり感じておらず、「消極的友人関係」や「学習意欲の欠如」の因子尺度得点も低いことから無気力感低群とした。また、クラスター3はクラスター1とは逆の特徴が見られた

ので無気力感高群とした。クラスター2は第2因子の「身体的不全感・無気力感」の因子尺度得点が無気力高群よりも高いという特徴はあるが、その他の3因子については無気力感低群と高群の間であることから無気力感中群とした。以上のことから、無気力感高群は中群、低群に比べて、「学習意欲の欠如」の得点が高く、「身体的不全感・無気力感」「消極的友人関係」の得点が低いという特徴が明らかになった。

(Table 1)　小学生の無気力感尺度の因子分析結果

因子	No	質　問　項　目	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7	共通性
生活将来の見通し欠如	1	自分にはやりたいことがはっきりしている	.585	-.163	-.080	.093	.206	.270	.076	.505
	12	テストがあると言われたら、そのための勉強をする	.557	-.083	-.179	-.264	.001	-.046	.114	.434
	13	勉強で分からないことがあると、自分で調べてみる	.543	.204	-.133	-.308	-.001	-.190	.168	.513
	23	自分が困った時、相談できる友達がいる	.469	.153	-.416	-.120	.148	.082	-.190	.495
	4	大人になったときやりたい仕事が決まっている	.612	-.069	-.029	.082	.121	.008	-.221	.451
	6	大人になったとき、どんな生活をしたいか決めている	.598	-.053	.104	.004	.164	.024	-.365	.532
	11	授業のノートは言われなくてもきちんととるようにしている	.589	-.013	-.195	-.279	.070	.003	-.036	.469
	2	勉強以外でこれだったら自分に任せてくれというものがある	.359	-.031	.049	.031	.290	.253	.051	.284
身体的不全感無気力感	15	よく頭が痛くなる	.016	.755	.123	-.073	.025	-.010	-.032	.593
	14	すぐ体がだるくなってしまう	.044	.718	-.015	-.041	-.100	-.022	.107	.540
	16	いろんなことがめんどくさくなることがある	-.202	.468	.327	.113	.065	.283	-.028	.464
	18	朝食の時、食欲がないことが多い	.102	.457	.173	.132	-.049	-.107	.113	.293
	10	学校の授業についていけない	-.061	.420	.148	.121	.100	.134	-.047	.247
	17	用もないのに、つい夜更かししてしまうことが多い	-.164	.410	.272	.248	.259	-.006	-.038	.399
	24	何かを計画する時、自分で計画するより人の決めた事にしたほうが楽だ	-.125	.347	-.047	.243	-.027	.233	.089	.260
	27	いくら努力してもだめなことが多い	-.106	.333	.244	.237	.127	.318	.193	.393
消極的友人関係	20	1人でいるのが1番好きだ	-.175	.202	.698	.025	.106	.071	.000	.545
	21	友達と一緒にいると疲れる	-.071	.112	.666	.223	.008	-.071	.233	.570
	22	友達と遊ぶのが面倒くさい	-.017	.169	.583	.109	-.082	-.073	-.030	.393
	28	人生は自分ではどうすることもできない	-.048	.122	.413	.207	-.071	.212	.104	.292
学習意欲欠如	8	家では宿題以外の勉強はしない	-.077	.002	.242	.652	.033	-.031	-.026	.493
	7	授業になかなか集中できない	-.063	.169	.137	.607	-.066	.199	.225	.515
	9	宿題を忘れてしまうことが多い	-.125	.384	.161	.462	.071	-.062	.049	.414
F5	3	自分には得意なものがある	.303	-.016	-.031	-.144	.772	.116	-.040	.725
	5	勉強以外で熱中しているものがある	.295	.098	-.069	.157	.499	.187	.067	.412
F6	26	腹が立ってもけんかをする気がしない	.155	.011	-.063	-.080	.068	.461	-.004	.251
	25	親や先生に注意されても言い返そうと思わない	-.013	.024	.042	.085	.084	.458	-.041	.228
F7	19	なやみを話せる友達はいない	-.139	.135	.361	.184	.084	-.031	.676	.667
		寄　与　率	9.89	8.92	8.13	6.09	4.29	3.65	3.31	
		累積寄与率	9.89	18.82	26.95	33.05	37.34	41.00	44.32	

注) F5 充実感の欠如　　F6 非能動性　　F7 孤独感

(Table 2)　学校環境適応感尺度の因子分析結果

因　子	No	質　問　項　目	F1	F2	F3	F4	F5	共通性
学習意欲	47	授業をよく理解できている	.635	.216	.008	.041	.062	.455
	44	勉強に積極的である	.585	.280	.102	.145	.193	.489
	46	勉強が楽しいと思う	.579	.286	.271	.043	-.041	.494
	49	勉強の目標を決めて努力している	.563	.069	.267	.298	.031	.483
	45	ある程度勉強ができるほうだ	.548	.119	.003	.203	.062	.360
	34	先生によく質問する	.503	.099	.300	-.104	.255	.429
	48	家庭学習を決めてやっている	.395	.149	.249	.282	.019	.320
規則態度	39	決まりを守ろうとしている	.234	.774	.153	.191	.026	.714
	40	学校のきまりはあってあたりまえだ	.254	.683	.200	.172	.090	.609
	41	学校のきまりは進んで守っている	.287	.657	.113	.195	.031	.566
	42	学校のきまりに不満はない	.059	.579	.081	.113	.334	.469
	33	自分の学校の先生に対して素直である	.351	.525	.309	.188	.003	.530
教師関係	30	なんでも相談できる先生がいる	.075	.185	.731	.094	.100	.594
	31	友達のように親しみを感じる先生がいる	.032	.090	.708	.116	.082	.530
	32	先生と気軽に話すことができる	.180	.093	.683	.170	.108	.548
	29	先生と話そうとしている	.283	.174	.560	.081	-.017	.431
友人関係	35	多くの友達を持っている	.103	.203	.123	.684	.169	.563
	38	楽しい友達を持っている	.130	.384	.152	.657	.085	.626
	37	性格は明るいほうである	.188	.119	.228	.396	.206	.301
自己理解	43	自分はユーモアのある人間である	.104	.146	.164	.275	.744	.689
	36	自分は人付き合いが上手である	.316	.122	.080	.499	.511	.631
		寄　与　率	12.983	12.794	11.548	8.739	5.505	
		累積寄与率	12.983	25.777	37.325	46.054	51.569	

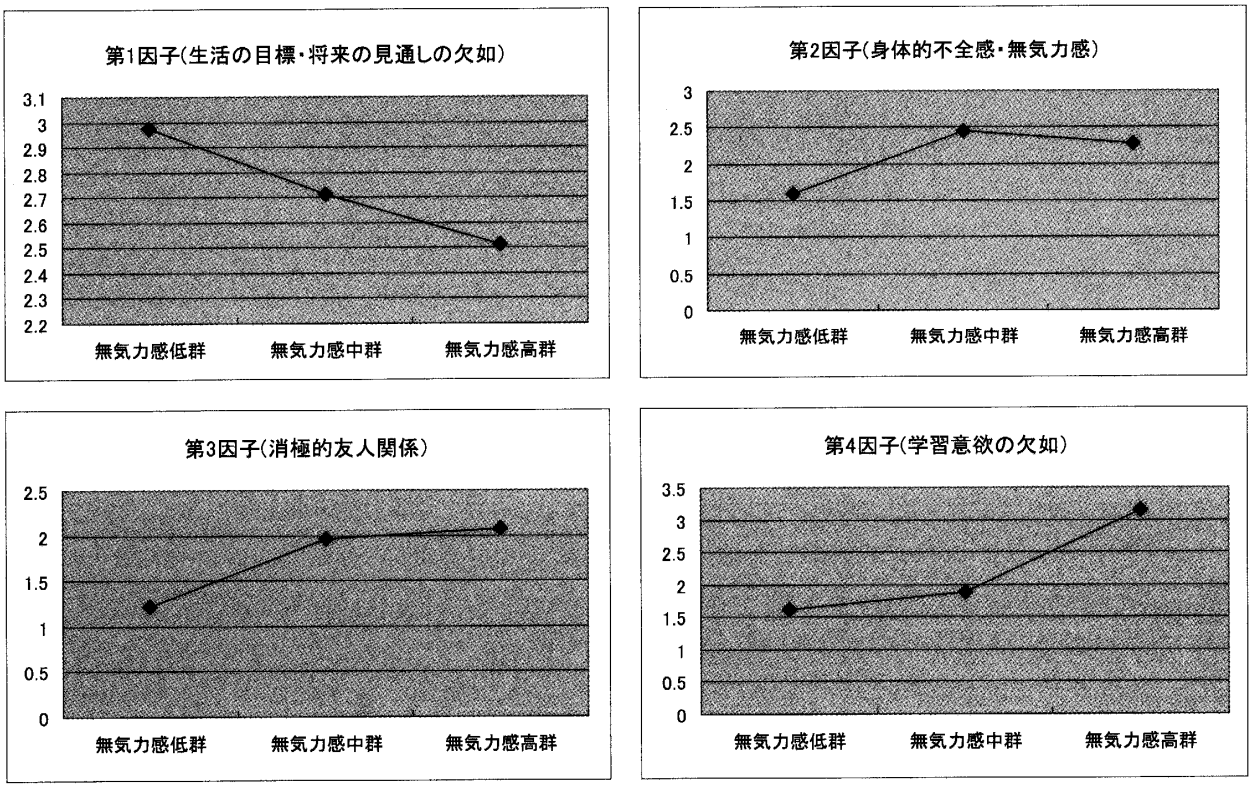
(Table 3) 無気力感尺度得点によって分類した無気力感3群の無気力感因子尺度得点の平均および標準偏差

( ) は標準偏差を表す
第1因子は逆転項目

	無気力感低群 (N=78)	無気力感中群 (N=40)	無気力感高群 (N=39)
第1因子 (生活・将来の見通しの欠如)	2.97　(.66)	2.71　(.40)	2.52　(.70)
第2因子 (身体的不全感・無気力感)	1.60　(.33)	2.46　(.57)	2.27　(.49)
第3因子 (消極的友人関係)	1.21　(.22)	1.96　(.56)	2.08　(.84)
第4因子 (学習意欲の欠如)	1.62　(.42)	1.89　(.38)	3.15　(.52)

(Figure 1) 無気力感３群の無気力感尺度因子尺度得点の平均

（第１因子は逆転項目）



次に、学校環境適応感尺度の各因子尺度得点を各群ごとに平均と標準偏差を求めた(Table 4)。これを図示したものがFigure 2である。

無気力感３群の学校環境適応感の特徴を調べるために、学校環境適応感の各因子尺度得点を従属変数にし、３つの群を要因として有意水準５パーセントで分散分析を行った。その結果、第１因子「学習意欲」、第３因子「教師関係」、第４因子「友人関係」の３つの因子において群間に有意な差が認められた。

第１因子では、低群より中群が低く、低群より高群が低かった。第３因子では、低群より高群が、中群より高群が低かった。第４因子では、低群より高群が低かった。

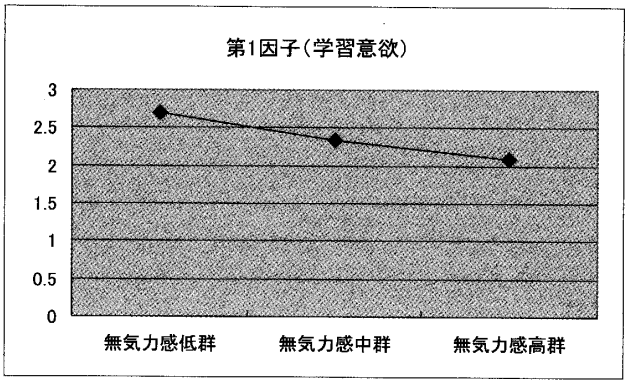
無気力感と学校環境適応感の関係をみると、無気力感低群は、学校環境適応感のすべての因子において得点が高い。逆に、無気力感高群は、学校環境適応感のすべての因子において得点が低い。特に、教師関係においてと学習意欲の得点の低さが目立っている。

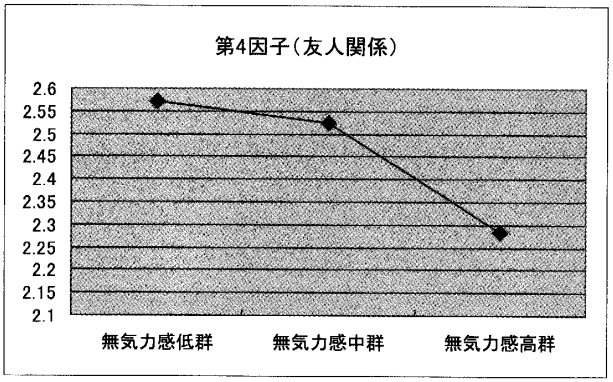
(Table 4) 無気力感３群の学校環境適応感因子尺度得点の平均と標準偏差

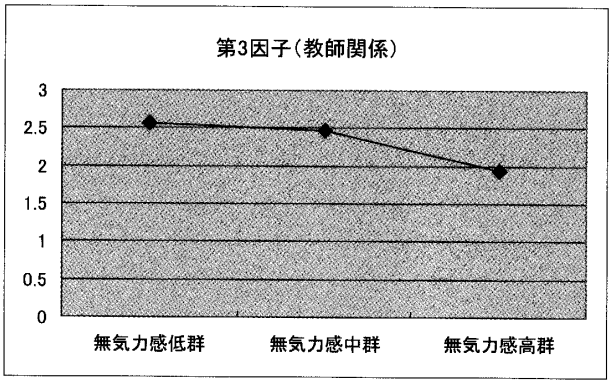
（ ）は標準偏差を表す

	無気力感低群 (N=78)	無気力感中群 (N=40)	無気力感高群 (N=39)
第１因子 (学習意欲)	2.69 (.65)	2.33 (.61)	2.08 (.62)
第３因子 (教師関係)	2.56 (.87)	2.48 (.83)	1.94 (.76)
第４因子 (友人関係)	3.38 (.73)	3.33 (.65)	2.96 (.78)

(Figure 2) 無気力感３群の学校環境適応感因子尺度得点の平均の図示







4　考　察

本研究は、小学生用無気力感尺度（28項目）（笠井、村松、保坂、三浦、1995）を小学５年生に実施した。先行研究では、「充実感・将来の展望の欠如」「学習不適応感」「身体的不全感」「消極的友人関係」「非能動性・無力感」の５つの因子が抽出されたが、本研究では、「生活の目標・将来の見通し」「身体的不全感・無気力感」「消極的友人関係」「学習意欲の欠如」「充実感の欠如」「非能動性」「孤独感」の７つの因子が抽出された。この中の「充実感の欠如」「非能動性」「孤独感」の因子は、２つや１つの項目で構成されていることや不安定な項目もあることから、この無気力感尺度の各因子は小学生の無気力感の様態を明らかにするものとしては、まだまだ研究の余地があるといえる。

また、第1因子「生活・将来の見通しの欠如」の項目に、先行研究の「充実感・将来の展望の欠如」の項目だけではなく、学習に関する項目や友人関係に関する項目が含まれていたことから、先行研究と違って無気力感の因子構造は複雑なものになっていた。これらの結果から、1995年の笠井らの研究で示された小学生の無気力の実態に比べて、現在は生活のいろいろな場面において無気力感を感じており幅広いものとなっていることが明らかになった。このことは、さまざまな時代背景の中で、子どもたちがゆとりを失い無気力感を感じるようになったことを表しているのではないかと考える。

「生活の目標・将来の見通し」「身体的不全感・無気力感」「消極的友人関係」「学習意欲の欠如」の各因子については、比較的安定したものと見ることができる。尺度が異なるために、統計的には直接比較はできないけれども、無気力感尺度の下位尺度得点の平均値を手がかりに小学生の無気力感の様態を考察してみると、小学生は「学習意欲の欠如」の得点が高く、「身体的不全感」と「消極的友人関係」の得点は低かった。小学生にとって、

学習が生活の中で大きなウエイトを占めているので、無気力感を学習面で多く感じていると言えよう。このことは、無気力感高群の「学習意欲の欠如」の得点が特に高いことからも説明できよう。教師は子どもたちの学習意欲を高めるために、学習の仕組み方や言葉がけを工夫する必要がある。

また、ここで得られた3つの群の人数をみると、無気力低群と中群と高群の比は2対1対1になっており、全体の約4分の1の子どもたちが無気力感をかなり感じている。このことから、多くの小学生が無気力感を感じていることが言えよう。

次に、学校環境適応感尺度（21項目）（内藤、浅川、高瀬、古川、小泉、1987）を実施した。先行研究では「学習意欲」「規則態度」「教師関係」「友人関係」の4つの因子が抽出されたが、本研究では「学習意欲」「規則態度」「教師関係」「友人関係」「自己理解」の5つの因子が抽出された。学校環境適応感尺度においては、先行研究の「友人関係」の因子項目が、本研究では「対自己」と「対友人」に分かれた因子構造になったが、先行研究とほぼ同様の因子が得られた。このことは、学校環境適応感尺度の5因子は比較的安定しているものと見てよいだろう。また、友人関係の得点が特に高い。このことは小学5年生にとって、友達が学校生活の重要な位置を占めており、学校環境に適応するためには友達との良好な関係が必要であると言えよう。

無気力感と学校環境適応感との関係をみると、無気力を感じている児童ほど、学校環境に適応していないことが明らかになった。特に、無気力感高群の「教師関係」の得点が著しく低い。無気力感を強く感じている児童は、教師に対して気軽に話しかけたり、親近感を持ったりすることができにくいことが明らかになった。このことから、無気力感を感じている児童に対して、教師はほめたり、良さを認めたり、言葉がけをしたりするなどの積極的な働きかけをしていくことが必要である。子どもたちが学校生活の中で、生き生きと意欲的に活動するために、1人1人の子どもへのかかわり方に気を配ることが教師に求められるであろう。

また、無気力感高群の児童ほど、無気力感低群の児童より教師との関係だけでなく、友人との関係においての得点も低い。全般的に他者との人間関係に消極的であることが明らかになった。人間関係がうまくいくことが、学校環境に適応する大きな要因になることが分かった。よって、教師は、子ども同士の人間関係がスムーズにいくような活動を日々生活の中に盛り込むように心がけなければならない。

本研究は、単一校での、単一学年の調査であり、どこまで一般化できるかは疑問の残るところではある。しかし、小学生の無気力感が学校環境への適応と関係があり、特に学校での人間関係や学習とかなり関係があることが明らかになったことは、今後の教師の関わり方や指導に何らかの示唆を与えるものとなったのではないかと考える。

また、本研究で、子どもの適応に教師は大きく影響を及ぼすことが明らかになったので、今後、学校における子どもの適応と教師の適応や指導·態度のあり方についての関係を研究したい。

5　引用文献

深谷昌志（編）1990　シンポジウム・子ども　「現代のエスプリ　別冊」　至文堂

古市裕一　1991　小中学生の学校ぎらい感情とその規定要因　カウンセリング研究, 24, 123-127

笠原　嘉　1977　「青年期ー精神病理からー」　中公新書
笠井孝久・村松健司・保坂　亨・三浦香苗　1995　小学生·中学生の無気力感とその関連要因　教育心理学研究, 43, 424-435
加藤隆勝　1987　「青年期の意識構造」　誠信書房
文部科学省　2003　今後の不登校への対応の在り方について（報告）
森田洋司　1991　「不登校」現象の社会学　学文社
小田　晋　1991　子どものアパシーとは何か　教育心理, 39, 6-11
武内　清　1993　学校教育と無気力な子ども　児童心理　7月号884-890
内藤勇次・浅川潔司・高瀬克義・古川雅文・小泉令三　1987　高校生用学校環境適応感尺度作成の試み　兵庫教育大学研究紀要, 7, 135-145
楡木満夫　1991　発達段階に応じたアパシーの特徴　教育心理, 39, 20-23